

「人間は見かけほど違わない」

昨日の新聞の夕刊に「人間は見かけほど違わない」と題して、東京大学教授で人類進化学者の海部陽介さんのインタビュー記事が載っていた。

「10万年以上前までは、旧人であるネアンデルタール人、ジャワ原人、フローレス原人などいろいろな人類が地球上に同時にいたことが分かってきた。これらの人類は絶滅などし、アフリカにいた旧人から30万～10万年前に進化したホモ・サピエンス1種だけが生き延びて今日に至る。ホモ・サピエンスはたったひとつの種だが、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、アメリカ大陸、そして太平洋の島々まで進出し、地球上の陸地のほぼすべてに住んでいる。これまでの研究で、世界各地の現生人類は、見かけの違いは大きいですが、DNAは驚くほど均一であることが分かってきた。現生人類は各地の気候、風土に適合するよう、あるいは偶然の変異で、肌の色などの一部の身体を多様に変化させてはいる。ただ、そうした差異は一部の形質に限られる。私たちは外見が違うと中も違うと錯覚するが、おいしさなどの味覚や嗅覚、喜怒哀楽の感情はかなり共通で、だからこそ和食が世界で流行ります。文化や価値観の多様性を知り、違いの尊重は大切だが、違いばかり強調し、理解できない、わかり合えないとならないようにすることが必要である。見かけの印象ほど人間は違わないというのが人類学の発見の大きな成果である」

多様性という言葉をよく耳にする。多様性とは「ある集団の中に異なる特徴・特性を持つ人がともに存在すること」である。その言葉は人種や国籍、性別、年齢、障がいの有無、宗教、性的指向、キャリア、価値観など幅広い範囲で用いられる。多様性を知り、一方で共通点を理解し、差別を助長する誤解や偏見を減らすことが大切である。上野の国立博物館の地下2階に、人類がアフリカで生まれ、世界各地に拡散していった展示がある。人類、元は1種なのだから、少しの差異があっても、ほとんどは共通している。その証拠に、たった1つのボールを枠の中に入れるゲームに、世界中のほとんどの人が夢中になっているのではないか。

12月14日 校長 鈴木 幸雄

◆問題 アナログの時計がある。4時18分のとき、長針と短針でできる角は何度になるだろうか。